

鳥種別生態と防除の概要：ムクドリ

※中央農業総合研究センター 鳥獣害研究室作成(担当:山口)

※Ver. 1(2001年8月6日)。

※Ver. 3.2(2005年3月11日)–防除策を加筆修正。

※無断複写・転載をお断りします。研修資料等としてご利用の場合にもご一報ください。

※未発表データや著作権の設定されているデータ等については掲載できないのでご了承ください。

1 ムクドリの一般的特徴

(1) 分類・名前

スズメ目ムクドリ科。

学名 *Sturnus cineraceus*, 英名 Grey Starling, White-cheeked Starling

日本にはムクドリの他にコムクドリ *Sturnus philippensis* が夏鳥として生息する他、希な旅鳥や迷鳥として数種類が渡来する。

(2) 形態・行動の特徴

全長 24cm, 体重 75–90 g。雌雄ほぼ同色。背は黒褐色で、腹は淡く、頭頂・翼・尾は黒味がつよい。頭頂から頬に不規則な白色部がある。全体に暗い色調の中で、脚と嘴は鮮やかな橙色で目立つ。また飛んでいるときなど腰の白色部がよく目立つ。主に群れで生活し、夏から秋にかけては笹藪や街路樹などに大集団でねぐらを作る。「キュルキュル」「ジャージャー」などいろいろな声を出す、きれいな声ではない。



(3) 生息地・分布

日本と中国北部・沿海州で繁殖し、冬は中国南部・台湾・西南日本に南下。日本では一年を通じて全国で見られるが、九州以南では数が少ない。また北海道では夏鳥であったが、近年は道南や道央で越冬するものが増えている。農耕地、公園、庭園、山麓の林、牧場、村落付近の林、果樹園、ゴルフ場などに生息する。

(4) 餌

雑食性で、動物質ではミミズや昆虫を食べ、植物質では初夏には桜の実、秋にはエンジュ、ネズミモチなどの木の実を食べる。果樹のモモ、ナシ、ブドウ、リンゴ、カキなども食べるが、かんきつ類は食べない。秋、冬には大群で農耕地に下り、地上を交互歩行しながら、土の中に嘴を差し込むようにして畑や芝地の昆虫などを食べる。

(5) 繁殖

3月下旬から7月にかけて、年に1–2回繁殖する。一夫一妻。疎林の樹洞や人家の戸袋など建物のちょっとしたすき間に、枯れ草、羽毛、獣毛、落ち葉などで巣を造る。薄い青緑色の卵を 4–7 個産む。雌雄で抱卵し約 12 日でふ化、その後約 23 日で巣立つ。巣立ちヒナはその後1ヶ月くらい親と行動を共にする。家の戸袋などで繁殖した場合、繁殖中の鳴き声、悪臭、繁殖終了後にはダニが発生し問題になることもある。

(6) 社会生活

一夫一妻。繁殖が終了する6月末頃から竹林や市街地やその周辺の林、また街路樹などに夏ねぐらを形成し、数百からときには数万に及ぶ個体が集合する。この夏ねぐらは10月半ば頃にはなくなり、周囲にたくさんの冬ねぐらが出現する。冬ねぐらの群れは夏ねぐらに比べると小さく、数百〜数千羽程度で、それも冬の間に増えたり、減ったりねぐらが消失したりする。冬ねぐらはほとんどが竹林につくられる。

採食地では10羽からときには数百羽もの群れになる。

(7) 人との関わり

古くは田畑にて害虫を多く食べることで益鳥とされていた。しかし、1960年代以降になるとナシへの被害が問題になり、他の果樹にも被害を出すようになったことから現在では害鳥と位置づけられることが多い。山よりも人里にすることが多いため人間に身近な鳥である。

有害鳥獣駆除で以前から捕獲されており、1980年代前半には年間10万羽を超えていたが、1990年代に入ると徐々に減少している。また1994年からは狩猟鳥に指定され、狩猟でも捕獲されるようになった(図1)。

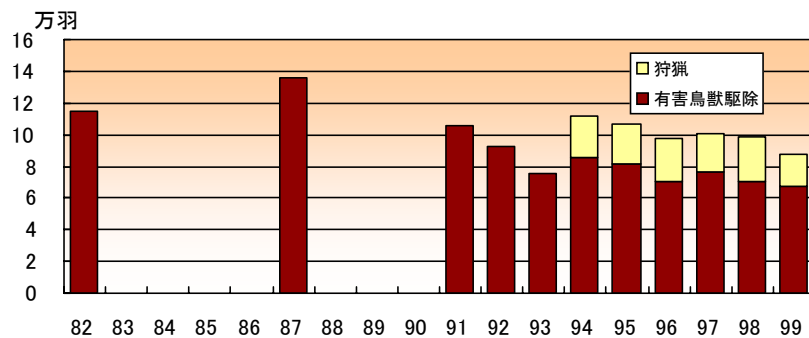


図1. ムクドリの捕獲羽数 (環境省自然環境局統計による)

2 被害の特徴

被害面積は1992年以降3-6千ha前後で推移しているが、1996年以降では被害面積、被害量とも減少傾向にある(図2)。ムクドリは大群で果樹園に飛来して食害するため被害は大きいものとなる。また人間社会との関係が密接なために、かなり人に慣れており、10mくらいに近づいても逃げないことが多く、防除を難しいものとしている。

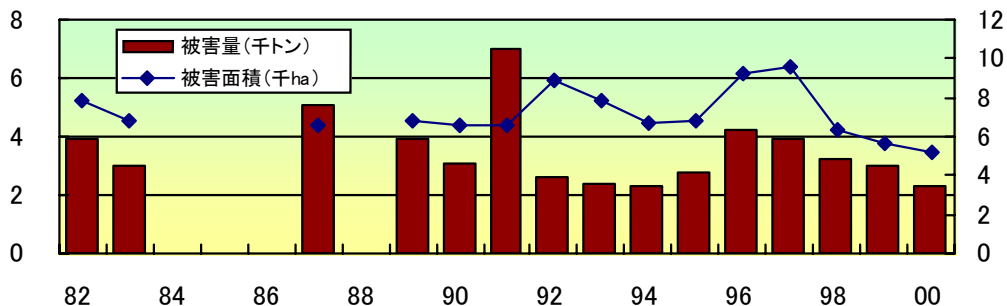


図2. ムクドリによる農作物被害量と被害面積 (農水省植物防疫課統計による)

(1) 時期

地域ごとに果樹の収穫期が被害の時期となる。主に6-10月頃。

(2) 場所

北海道から九州までほぼ全国に及ぶ。

(3) 作物や品種

東北地方では6月頃におうとうの被害が大きい。また初夏から秋にかけてはモモ、ナシ、ブドウ、かきなどの果実が次々に収穫期を迎え、熟した果実が加害される。ムクドリは数十から時には数百羽以上の群れで果樹園などに飛来して加害していくため、被害は甚大となる。

ナシの被害には品種間でかなりの差が認められることも分かっている。長十郎や二十世紀などの在来種はほとんど被害を受けないのに対し、近年改良された進水、幸水、豊水などが選択的に被害を受けている。これらの改良種は在来種に比べ一般に糖度が高く、果肉が柔らかいという特徴を持つ。

またムクドリはシヨ糖を忌避するため、シヨ糖濃度の高いかんきつ類を加害することはない。

(4) 昆虫による被害

果実類は鳥以外にも昆虫により被害を受けるが、アケビコノハ(蛾)などが口吻を差し込んで果汁を吸ったあとはスポンジ状になり腐敗が始まる。この腐敗し始めた部分をムクドリがつつくため、蛾による被害と鳥の被害が混同されやすい。ムクドリは新鮮で無傷の果実よりもこのような腐敗した部分から好んで食べるため、虫害防除も大切である。

3 防除策

(1) 遮断

ムクドリへの効果をうたった様々な防鳥機器も市販されているが、すぐに慣れを生じる。防鳥網を張るのが確実な方法である。果樹園で完全被覆を行えるのなら長年継続して使用できる支柱や網張り棚を設置してしまうのがよい。防鳥網を張る場合、ムクドリの侵入を防ぐだけなら 30mm 目でよいことになるが、スズメや果実吸蛾類、カメムシの被害防止、風害や雹害防止などの多目的利用を考えると 9-10mm 目がすすめられている。果樹類の場合には果実袋で保護するのも方法もあるが、ムクドリは袋の上からでも食害するので、形質や材質を改良する必要がある。

(2) 威嚇装置

ムクドリの飛来数が少ないときには爆音機やディストレスコールなどを用いた追い払い機器もある程度の効果は期待出来る。また猛禽模型や目玉風船、防鳥テープなども設置当初は効果が認められる。しかし、収穫時期が1ヶ月以上にもわたる場合には慣れにより効果が薄れる。また集団で飛来する場合にもこれらの装置への慣れは早くなる。これらの威嚇装置は、それまで防鳥対策を何もしてこなかったところや果樹園の周辺に安全な餌場があるようなところでは意外な効果を発揮することもある。慣れを生じさせないために防除手段を組み合わせ使用したり、次々と防除手段を変えていくということも考えられるがコストがかかるので注意が必要である。

(3) 駆除

多くの地域で実施されているが、捕獲による個体数抑制効果は少なく、それよりも銃による脅し効果や人間との緊張関係持続という面で貢献していると思われる。

(4) そのほかの例

つくば市近郊のナシ園では、7月と8月の2回、銃によってムクドリの駆除を行い、その後は園の中央に設置した爆音機を作動させるほか、園の側面だけを網で覆うことにより、ムクドリの被害はほとんどないという。このように防除策をいくつか組み合わせることにより防除効果の持続が期待出来る。

4 ムクドリについての文献資料

※代表的なものに絞っています。入手の便を考えて内容が重複している文献も載せてあります。

Lane, S. J. (1997) Preferences and apparent digestibilities of sugars by fruit damaging birds [*Sturnus cineraceus*, *Cyanopica cyana* and *Hypsipetes amaurotis*] in Japan. *Annals of Applied Biology* 130:361-370.

中村和雄・飯泉良則 (1995) Distress Call によるムクドリのねぐらの移動. *野生生物保護* 1:131-135.

坂本堅五 (1981) 果樹への鳥害に関する調査ー特にムクドリによるナシへの被害を中心としてー. *応用鳥学集報* 2:53-57.

安延義弘 (1983) ナシ果を加害するムクドリの防除法. *植物防疫* 37:538-542.